

「インフルエンザ・肺炎球菌予防接種」について



1. インフルエンザワクチンの効果について

インフルエンザにかかる時はインフルエンザウイルスが口や鼻から体の中に入ってくることから始まります。体の中に入ったウイルスは次に細胞に侵入して増殖します。この状態を「感染」といいますが、ワクチンはこれを完全に控える働きはありません。

ウイルスが増えると、数日の潜伏期を経て、発熱やのどの痛み等のインフルエンザの症状が起こります。この状態を「発症」といいます。ワクチンには、この発症を抑える効果が一定程認められています。

発症後、多くの方は1週間程度で回復しますが、中には肺炎や脳症等の重い合併症が現れ、入院治療を必要とする方や死亡される方もいます。これをインフルエンザの「重症化」といいます。時に基礎疾患のある方や高齢者の方では重症化する可能性が高いと考えられています。ワクチンの最も大きな効果は、この重症化を予防する効果です。

以上のように、インフルエンザワクチンは、接種すればインフルエンザに絶対かからない、というものではありませんが、ある程度の発病を阻止する効果があり、また、たとえかかっても症状が重くなることを阻止する効果があります。ただし、この効果も100%ではないことにご留意ください。



2. 肺炎球菌ワクチンの効果について

肺炎球菌は、健康な人の鼻やのどなどに常に存在するものの、ふだんは病原性を発揮しません。しかし、インフルエンザなどの感染症が原因で、のどの粘膜が損傷を受けると肺炎球菌の発育・増殖が促進され、気管支炎や肺炎をひき起こすようになります。肺炎球菌による肺炎の潜伏期は1~3日と言われています。

肺炎球菌ワクチンは、高齢者の肺炎の原因として頻度の高い肺炎球菌に狙いを絞った不活化ワクチンで肺炎を予防できるほか、万が一肺炎になっても軽症で済むなどの効果がありますが、すべての肺炎に有効ということではありません。肺炎球菌ワクチンは効果持続が比較的短く約5年有効と言われていますが、実際には、老年期に一度接種しておけば十分とも考えられています。

肺炎球菌ワクチンはあくまでも肺炎球菌からなる肺炎を予防するもので、すべての肺炎を予防できるわけではありません。また肺炎球菌からなる肺炎を100%予防できるものでもありません。

最後に・・・

ワクチンを接種したからといって安心せず、日頃から手洗いやうがいを行行し、規則正しい生活で体調を整えることが大切です。